

## 2年前の自分へ

第13期 矢野 瑞喜

フィーリング重視の僕にとって、エッセイという形で言葉を残すというのは、正直非常に苦手な作業だ。何を書けばいいか迷って、迷って、迷った結果、〆切当日に焦って執筆している。

そんな現在進行形で余裕のない僕が、大学2年当時書いた小野ゼミESを振り返ってみたところ、「将来どのような人間になりたいか」という設問に対して、「心に余裕を持った人間」と答えていた。具体的には、辛いときにも仲間や同僚のことを気にかけることができたり、何事にも遊び心を持っている、そんな「心の余裕」らしい。いい事言うじゃん、と感心すると同時に、そんな自分になれたのか、今の自分に聞いてみると、やっぱりまだまだ足りない。辛いときには、建前上の気遣いばかりで、本当の意味では仲間を気かけられなかったし、遊び心が消耗した時、僕の顔は完全に死んでいた。おまけに最後のエッセイでも〆切に追われて、現在「心の余裕」一切なし…。さて、この状況を2年生の自分にどう弁明しようか。

きっとスリリングな毎日が待っているんだろうなーなんて思って、小野ゼミに入会して、4年になったら今よりずっとしっかりした人間になるのかなーなんて思って、毎日あくせく活動して。でも正直なところ、気が付いたらあつという間に4年生が終わるって感じです。入ゼミ前の自分の将来像なんか意識するのを忘れてしまうくらい、ほんと一瞬でした。卒業間近の今、前を見たら社会に出ていくことに漠然とした不安を感じるし、全然大人になり切れていない自分があるけど、ふと後ろを振り返ったら、これが自分の大学時代だって胸を張って言えるような宝物が、小野ゼミで山ほど出来ました。メンバー間の対立、決まらない仮説、関マケ準優勝の悔しさ、活動の節々で組織というものの恐ろしさと素晴らしさを、代表という立場でひしひしと感じた論文活動、自分たちの努力がきちんと外部にも認めてもらえたビジコン、後期最後の本ゼミ前にやっと完成した“夏”ケース。これら数々の活動は、今でもかつての状況が鮮明に思い出せるほど、輝いています。そして、誰よりも熱く、そして親身になって僕に指導して下さった小野先生、相談すると弄ってくるけど、常に本音で、幼稚な自分のことを真剣に思ってくれる菊盛さんや世名さんをはじめとする先輩方、2年間辛いことも楽しいことも一緒になって駆け抜けてくれた同期、年下と絡むのが苦手で気難しい自分のことも慕ってくれた後輩達。小野ゼミで関わった全ての方々のお蔭で、この宝物が手に入りました。入ゼミ前に描いた将来像は、今後の社会人生活でさらに磨いていくとして、小野ゼミでの2年間は、入ゼミ前の僕が思い描いていたものとは、また別の形で、僕にたくさんの宝物をくれました。そして、これらはきっと2年前の自分も納得してくれるような宝物だと僕は胸を張って言えます。

最後に、この2年間で関わった全ての方々へ心より感謝を申し上げ、ついでに小野ゼミにちゃんと受かってくれた2年前の自分にも軽く感謝しつつ、このエッセイを終えたい。